

2018年7月10日

日本高等教育評価機構

大学は社会の変化に順応するだけでよいのか

猪木 武徳

前置き：750を超える日本の大学（私学はその約4分の3）は多種多様であるから一般論は難しい。だが共通の問題・課題がある。大学問題を語るときの目的は何なのか。教育・研究の理想像を求めるのか、経営・ガバナンス、少子化への対応などの問題なのか。いずれにせよ「日本の将来にとって」という長期的な視点が欠かせない。

1. 地方をよく知り、地方に定着する人材

- ・ 明治以降、日本の教育システムの地方分権は弱まった、それをいかに取り戻すか
- ・ 大学の教育・研究・カリキュラム・授業料が均一化し過ぎていないか
 （参考）2015-2016年度米国の私立4年制大学の平均年間授業料は、3万2,000ドル（約320万円）で、州立大学では、アウト・オブ・ステイトと呼ばれる州外学生は2万4,000ドル（約240万円）、イン・ステイトと呼ばれる州住民の学生であれば9,400ドル（約94万円）である。
- ・ 地方自治体に高等教育行政を専門とする組織はあるか、安定した財政基盤は確立できるか
福沢諭吉『分権論』（参考資料1）

2. 科学・技術の偏重と人文学の軽視

- ・ サイエンス分野の学問の基準を人文学に当てはめていいのか
- ・ 「真理」（論証できる）と「真理らしさ」を区別しない
- ・ 「厳密さ」「正確さ」vs「想像力」「歴史意識」
 業績の評価の基準、時間幅などは異なる
- ・ Steve Jobs：Technology alone is not enough (*New Yorker*, Oct.7, 2011)

3. 職業教育機関への傾斜

- ・ 産業界からの「即戦力」「役に立つ教育」という要請の性急さ
 （2014年5月パリ OECDの安倍首相の基調演説）
 すぐ役に立つことは、すぐに役に立たなくなる
- ・ 職業上の技能は仕事をしながら（OJT）学ぶものが多い
- ・ 産業界との協力は必要、しかし大学と産業界には一定の距離が必要
- ・ 英語（外国語）教育の歪みにも表れている コミュニケーションの道具という面ばかり

りが強調される。しかし言語は「思考」の道具である

4．教養とは何か

- ・ 福沢の智(intellect)と徳(moral)の分類 マトリックス (参考資料2)
- ・ キケロの言葉

「紫を染め込もうとする人が、その前にある種の薬剤に羊毛を浸すように、精神も書物 litterae と自由学芸によって予め陶冶され、そして知恵を受け入れる手ほどきと準備をされることが望ましい。(キケロ『ホルテンシウス』)」

- ・ 福田恒存の教養論

5．知的遅しさを育てる

- ・ 知識と知識欲、教養と学歴

「定型的な考え方」しかしない人だけでは社会はよくなる

「非定型」にどう対応するか、多数に引きずられない考え方ができる、「たくましい人材」も社会にとって必要 「古典に学ぶ」という姿勢

- ・ 知れば知るほど、未知の領域が広がる

古典「に」学ぶ 日常的なものでないものに接したときの判断力（自立の思考）

数学、国語、外国語、物理、哲学などの基礎科目を学び、論理的思考を身に付け、明晰な文章を書く

参考資料1：福沢諭吉「分権論」(『福沢諭吉選集』第五巻、岩波書店)から

集権論者は常に揚言して云く、政府の地方事務を取扱ふは人民の自から之を処するに優ると。此説或は然らん。中央政府は独り開明にして地方の人民は全く無智、中央は神速にして地方は緩漫、中央は事を行ふに慣れて地方は命に従ふに慣るゝが如き有様ならば、此説或は然らん。然り而して、一は長ずるが為に事を執り、一は短なるが為に命を聞くとするときは、長ずる者は愈長じ、短なる者は愈短を加ふ可きのみと。(48-9頁)

然るに今、この自治の習慣を養ふに何を以て始めん歟。先づ自国に在て自治の地位を占め、然る後に外交にも及ぼす可きのみ。其自治の地位を占め自治の精神を養ふの路は、地方の治権を執て公共の事に参与するより外に、実地の良策ある可らず。故に、地方分権は外国交際の調練と云ふも可なり。是即ち余輩が分権の急を論じて、今正に時なりと称する所以なり。(同上、77頁)

参考資料2

公、私、智、徳のマトリックス

(福澤諭吉『文明論之概略』巻之三、第六章「智徳の弁」より)

	私	公
智 (インテレクト)	物の理を究めて 之に應ずるの働 (工夫の小智)	人事の軽重大小を分別し 軽小を後にして重大を先にし 其時節と場所とを察するの働 (聡明の大智)
徳 (モラル)	(一心の内に属する) 貞実、潔白、謙遜、律儀など	(外物に接して人間の交際上 に見はるゝ所の働) 廉恥、公平、正中、勇強など

徳義(モラル)は「心の行儀」で、「一人の心の内に快くして屋漏に愧じざるもの」を指す。智(インテレクト)は、事物を考え、事物を解し、事物を合点する働きである。ここで福澤はさらにそれぞれを「公」と「私」に分ける。(ここの論の進め方は、明快で議論の深みを失わせない福澤らしい卓抜な技である)したがって、徳、智、公、私で、2×2のマトリックスが出来上がる。ではこれら4つ要素は各々具体的に何を指すのか。

1)私徳は貞実、潔白、謙遜、律儀など、「対自的」な個人の範囲に限定された徳を指す。ときにメディアが好んで取り上げる金銭やセックス関係のスキャンダルもこの私徳に関するものがほとんどである。メディアが政治家を叩くときはこの私徳にまつわる醜聞が多い。

2)公德は廉恥、公平、正中、勇強など、いわゆる「対他的」「社会的」な徳である。正義の感覚に富んでいるか、大勢の前で少数意見でも堂々と発言できるか、フェアであるか、名誉を重んじるか、などにかかわる徳である。

3)私智は物の理を究めてこれに応じる働きをさす。いわゆる受験秀才の多くはこのタイプの智恵に秀でている。碁知恵、算勘、すなわち碁が強い、計算が達者という能力もこの私智に属する。established knowledge はこれに関わるものがほとんどであろう。

4)そして最後の公智は、事柄の軽重大小を分別し、何を優先すべきかを時と場所とを察しつつ判断する働きを指す。この、「何が大事か、何を何に優先すべきか」の判断力は「聡明の大智」と呼ばれ、福澤が最も重視する智恵であった。

講演 「大学は社会の変化に順応するだけでよいのか」

【講師 猪木 武徳 氏 略歴】

1945年 滋賀県出身

京都大学経済学部卒業、米国マサチューセッツ工科大学大学院修了 (Ph.D.)

【主な略歴】

1987年 大阪大学経済学部教授、経済学部長 (～1997年)

2002年 国際日本文化研究センター教授、所長 (～2012年)

2007年 日本経済学会会長 (～2008年)

2012年 青山学院大学大学院特任教授 (～2016年)

【主な受賞歴】

1987年 サントリー学芸賞

2002年 読売・吉野作造賞

2002年 紫綬褒章

【主な著書】

『経済思想』(岩波書店)、『学校と工場 - 二十世紀日本の人的資源』(ちくま学芸文庫)、『大学の反省』(NTT出版)、『経済学に何ができるか 文明社会の制度的枠組み』(中公新書)など